

日本文学部会

【概要】

朴 英美*

第9回国際日文学コンソーシアムは「グローバル化と日文学」を主題として行なわれた。日本文学部会は2日目(16日)の9時半から12時半まで発表や講演が行なわれた。以下、日本文学部会の発表内容と質疑応答について概要を報告する。なお、紙面の都合上、すべてを記載できないことをご了承ください。

ヴィート・ウルマンさん(カレル大学院生)は「五山文学に見られるグローバル化の始まり」という題で発表なされた。東アジアでは仏教により国境を越える交流があり、禅僧の文学である五山文学にはグローバル化が著しく見られると話された。日本の禅僧の中でも絶海中津、義堂周信、一休宗純の漢詩を例にあげ、漢詩が日本化されていく過程について発表なされた。発表の後、五山文学はグローバルとまで言えるのかという質問を受けた。発表者は古典文学とグローバル化を結びつけて論じるのは難しいが、過去にも現代のグローバル化につながる要素はあったはずと答えられた。禅僧たちが海外を海外と認識せずに、それをベースに心境を詠むことがグローバル化と言えるのではないかと見解を述べられた。

浅井美峰さん(本学院生)は「肖柏と池田氏—連歌師と千句連歌主催者の関係について—」と題し、日本特有の文学である連歌を広く知ってもらおうとのねらいで発表なされた。千句連歌は単なる文学的な行事ではなく文化的で政治的な意味をもち、そのような千句連歌を成功させるための連

歌師の役割は大きいという。そのため、連歌師の肖柏には参加者各人が詠む句数に配慮したり、主催者に気を配ったりするなどの働きが見られると発表なされた。イベントとしての連歌の意義や連歌の知識を問う質問があり、連歌師同士のコミュニティは新しい情報を交換する方法としての機能があるとし、連歌というイベントを成功させるための連歌師の役割が再び強調された。

王凱洵さん(国立台湾大学院生)は『『ねじまき鳥クロニクル』における自我形成をめぐる—メEDIUMの存在に視点を—』という題で発表なされた。妻クミコが去った後のトオルが自我を発見していく変化について、「笠原メイ」との関係を中心に発表なされた。質疑応答の時間では、グローバル化の象徴でもある村上春樹の作品を日本人の作品として読むのは適切なのかという質問があった。村上春樹の小説で中国の話があるなど、最初は日本人の作家として理解し、その後に世界的な意味をもつ作品として読んでも良いのではないかと答えられた。

マルティン・ティララ先生(カレル大学)は「平安初期物語に見える恋愛のグローバル化」についてお話なされた。物語は新しいジャンルとして登場し、物語の中心は主人公たちのスキャンダルにあるということ、『竹取物語』の結婚を拒否するかぐや姫や『伊勢物語』の「女を盗む(奪う)」話はむしろ現代でこそ理解しやすいことを指摘なされた。質疑応答では物語のスキャンダルの意味について質問され、先生はスキャンダルには読者を驚かせる効果があり、隠された歴史を匂わせる

*お茶の水女子大学大学院院生

ことにもその意味があると答えられた。また先生は翻訳のグローバル化により、日本の物語も世界で理解される可能性についても話された。

范淑文先生（国立台湾大学）は「日本近代文学作品に語られる作家の異国体験—藤村・漱石の場合—」という題でお話なされた。范先生はグローバル化に対する議論は1989年から頻繁に行なわれたと指摘し、世界は一つであり自国や他国など異国の意識を捨てるのが真のグローバル化に繋がると話された。漱石の『満韓とこころ』では豪華な生活ぶりの統治者の描写と被統治者の悲惨な描写とは対照的に描かれており、そこに語り手の眼差しがあると話された。一方、藤村がフランス体験した後の作品『エトランゼエ』からは外国人への社会的な偏見を越え、個人的な心のコミュニケーションが見られると指摘なされた。漱石は「満州」の被統治者の悲惨な運命を描くが、統治者の成功を誇示した描写に隠蔽されているという范先生の意見に対し、その理由を尋ねる質問があった。范先生は、当時日本政府により、作家は海外開拓を宣伝するしかなかったが、クーリーたちが蔑視される様子を書くことでヒューマニズムを語ったのであり、そのような語り方は作家の倫理観によるものではないかと答えられた。

ダニエル・ストリューブ先生（パリ・ディドロ大学）は「グローバル化と日本文学の研究—ミハイル・バフチンの小説論を中心に—」で、ロシアの文学者ミハイル・バフチンの説を引用し、井原西鶴の新しい意味を見出すことを試みなされた。西洋のカーニバルに似たものが日本文化の遊郭であり、西鶴の作品には遊郭が多く登場しているという。『好色一代女』には遊郭の遊びの文化が表れており、作品の中での「西鶴の笑い」は俳諧文学の伝統と組み合わせて成立したと話された。『好色一代男』では悲劇と喜劇が絡み合う場面こそ「西鶴の笑い」を代表しているという。また『日本永代蔵』で莫大な遺産を受けとった息子が乞食になる話の教訓は、嘲笑の意味にも読み取れるア

イロニーを持っていると話された。それは、バフチンが主張する言葉の多層的な可能性の証拠と指摘なされた。最後に世界小説史の中でも西鶴の位置を考えるべきとご講演を終えた。グローバル化は普遍かという質問に対し、文学の中では普遍的なグローバル化があり、歴史の中で色々な形で進行すると答えられた。グローバル時代の文学研究は今日の現状を広く見て普遍的機能を考えるべきと答えられた。

日本文学部会では「グローバル化と日本学」という題に相応しく、グローバルの意味や定義について積極的に議論した。時代的にもグローバルという意味は変化しており、グローバルについて各自が考えている意味の差があることも分かった。

世界の中の日本文学の可能性やそのあり方について深く議論し、充実した時間を過ごすことができた。ご講演くださった先生方及び発表者の皆様、参加者の皆様に厚く御礼申し上げます。